

漫画研究への扉

日下, 翠
九州大学大学院比較社会文化研究院

南雲, 大悟
國學院大学・二松学舎大学・日本大学非常勤講師

アンカナー, ジラジランチャイ
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

佐島, 顕子
福岡女学院大学人文学部現代文化学科

他

<https://hdl.handle.net/2324/16791>

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-09-20. 梓書院
バージョン：
権利関係：

韓国少女漫画事情

～その流れと作品～

佐島 顕子

はじめに

1. 韓国少女漫画の黎明
2. 第二世代と同人誌『九番目の神話』
3. 雑誌の時代

おわりに

はじめに

『キャンディ・キャンディ』（水木杏子・いがらしゆみこ）とは1970年代後半に一世を風靡した少女漫画だが、韓国でも、知らない人がいない超有名漫画である。

韓国では日本大衆文化が禁止されていたと言われているが、それは「日本語文化」のことであり、翻訳された日本文化ならば、^{キムデジエン}金大中大統領の日本大衆文化解放宣言以前から、受け入れられていた。1970年代すでに山岡荘八『徳川家康』が『大望』のタイトルでステディセラーになっているほか、日本のベストセラーが多数紹介され続けてきた。音楽雑誌には必ず日本の音楽シーンを扱った写真記事やインタビューが掲載され、カラオケではハングルふりがなでJポップを熱唱できた。日本文化は映画・ドラマとコンサート以外はすでに事実上流通していたと言ってよい。むしろ、政策的に禁止していない日本の方が韓国のシーンに無知・無関心であった。日本でも昨今の『冬のソナタ』現象で韓国への関心がふえているが、それはドラマ・映画系列、もっといえば韓流スターに限定されがちである。

『キャンディ・キャンディ』とは、孤児キャンディの成長を、第一次世界大戦などを背景に描いた作品である。キャンディの愛らしさから「夢見がちな少女漫画の典型」という誤解を受けがちだが、実は恋人テリィとも別れ、「女性に最後に残るものは仕事と友達である」という結末を持ち、それに影響されて成長した読者が1960年代生まれの世代である。（『キャンディ』と同時に流行った『ベルばら』からは、世の中が間違っているなら革命を起こしてでも変えてしまえ、というメッセージを受け取り、バブルの時代に就職した私たちに、コワイものはなかった…）

『キャンディ・キャンディ』のアニメは1977年に韓国MBC局から放

送され、日本以上に大ヒットした。韓国で『キャンディ』といえば、今でも少女漫画の代名詞であり、新人スターやスポーツ選手には必ずテリィ（韓国名テリウス）という冠詞がつけられる。1998年にはテリィをそのまま芸名にした歌手がデビューしたこともある。

この『キャンディ』の生き生きとしたキャラクターと、奥行きのある少女の世界が、検閲と貸本制度のために行き詰まっていた韓国少女漫画界を復興させる起爆剤の役割を果たしたのである。

1. 韓国少女漫画の黎明

韓国少女漫画の始まりは1950年代にさかのぼる。

第二次世界大戦の終了と日本の侵略からの開放・独立は、それまでのねばり強く熾烈な独立闘争が実ったことを意味した。しかし、米ソ冷戦の影響は、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国という分断国家の成立と朝鮮戦争（1950～53）を引きおこす。

したがって、韓国の「戦後復興」は1953年に始まるのである。アメリカの戦後政策にとって日本の民主主義と経済復興が望ましかったがゆえに、国際的摩擦なく民主化・復興ができた日本と違い、植民地支配の後遺症・戦災・分断・冷戦の現実の中で、自力で民主化を実現していく韓国の道のりは長くならざるを得なかった。

1950年代の漫画は活劇・ギャグ・家族漫画に分類されていたが、朝鮮戦争による一家離散や貧困を扱った家族漫画の中から、けなげに生きる少女に焦点を当てたものが少女漫画として分化した。漫画評論家パク・イナによれば、現存する最初の少女漫画作品は1957年の『永遠の鐘』（ハン・ソンハク）である。戦災（朝鮮戦争）によって生き別れになった姉を捜す妹、母の形見の首飾り、意地悪なお金持ちのお嬢様、のような少女小説アイテムを配しつつ、少女の素直で美しい心が強調された。韓

国で少女漫画のことを「^{スジョンマンファ}純情漫画」と呼ぶのは、このゆえである。(純情漫画は今では単なるジャンル区分語にすぎず、内容が「純情」かどうかは一切関係ない。)

当時の韓国は軍事政権時代であり、学生や市民の身を犠牲にした民主化闘争の時代でもあった。政権は言論の自由を制限し、演劇・映画・放送番組のシナリオ、音楽レコードの歌詞、出版物の原稿などの事前検閲を義務づけていたが、漫画も例外ではなかった。

事前審議と呼ばれる原稿段階での検閲では、一つのコマの中で男女が二人きりなのはいけない、ひざ上スカート・長すぎる前髪は風紀上問題、アクセサリの多い派手な絵は奢侈心を刺激する、という厳しい基準を持っていた。内容的にも、ヒロインはけなげな良い子、「貧しさ」は甲斐性なしの父親の責任であり、まちがってもそこから社会矛盾の追求に走ってはならなかった。漫画が「作品」ではなく、「大人が小学生に与える健全娯楽」の範疇にあったため、絵・ストーリーともに決められた枠からはみ出すことが許されなかったのである。

それでもこの60年代には、手塚治虫等に影響を受けたミン・エニ、オム・ヒジャなどの少女漫画第一世代と呼ばれる女性作家が登場し、瞳の大きな愛らしい少女を描き、少女漫画最初の黄金期を築いた。

70年代にはいと検閲は形式的に多少ゆるみ、金髪ウェーブ、長いまつげ、というお人形のようにきれいな絵が描けるようにはなったが、新しい主題や展開は許されなかった。その結果、二十年も繰り返された継子いじめや薄幸の少女というお決まりのストーリーは、検閲には通るものの、ドラマ的には何の発展性も見られず、それはもはや、「漢江の奇跡」といわれる高度経済成長期の少女たちが共感できるものではなかった。

加えて80年代中盤までは少女漫画雑誌が存在せず、漫画の主流は、貸本として出版される書き下ろし単行本であった。どうしても漫画が欲しければ、貸本屋で貸出用の漫画を分けてもらうか、ソウル市内ならば鍾路五街あたりの貸本業者向けの漫画問屋で小売りを頼むものだったと

いう。現在では、漫画は読み捨てではなく個人で買って長く手元に置くものだという読者意識の成熟や漫画価値の上昇、そして娯楽の主流がインターネットやオンラインゲームに移動したことから、貸本屋の数はかなり減っている。

貸本最盛期には、業界を寡占する貸本出版社が人気劇画家に、毎週百ページ前後の単行本を一冊ずつ出させるほどの大量生産を強いた。販売用単行本や雑誌という発表の場をもたない漫画家の立場は非常に弱く、人気作家ともなるとアシスタントを大量に抱えて、本人は名前だけ、ストーリーも絵もタッチしていない粗悪品が流通していく、という現象もおきた。この状況に一番苦しんだのは漫画家自身であるが、生活のためには仕方なく、自然、作品はマンネリ化していった。

そういう検閲と貸本制度のために「少女漫画なんてつままない」と読者離れが起きて久しかった70年代の韓国少女漫画空白期に、『キャンディ・キャンディ』アニメーション版のヒットは衝撃的だった。79年に原作の海賊版が出版されると、少女たちは漫画に戻ってきた。当時読者の立場だった漫画家・黄美那は、貸本漫画のお決まりの表現ではなく、人物の多様な表情を描き分け、映画のような演出をすることに「ショックを受けた」と語る。

この『キャンディ』のヒットに、目はしのきく業者は日本から漫画本を買い込むと、セリフをハングルに貼りかえて印刷し、全国の貸本屋にばらまいた。縦書きゆえに右から左に進む日本の漫画に、左から右に進むべきハングルの横書きのセリフを貼ると、かなり不自然である。それで日本の漫画を裏焼きして左から右へ進むようにする、という方法も用いられた。人物のほとんどが、洋服の合わせも逆になる。

政府がこうした海賊版を摘発しだすと、業者は日本漫画を手本にして、そっくりに写した漫画を制作した。作者名を韓国人名に変え、ストーリーや背景を韓国に置きかえる。正規出版は生原稿検閲が前提だったので、ともかくも肉筆原稿が必要だったという事情もあった。政治的

表現、日本作品であることがわかる描写、規制をはみだす性的・暴力的シーンは省いたり描き替える「翻案」（ベッキ）漫画である。日本でも昔、翻案小説・ドラマが見られたのと同様である。水野英子『白いトロイカ』はキム・スク名義、『ベルサイユのばら』も、チョン・ヨンスク名義で出版された。もちろん現在では『ベルばら』もライセンス版が、池田理代子の韓国版序文もつけて発売されている。

当時韓国に流入した70年代の日本の少女漫画は、萩尾望都、竹宮恵子など「24年組」の活躍により、少女漫画の質・量が飛躍的に向上した黄金時代であった。わたなべまさこ『ガラスの城』、水野英子『白いトロイカ』、池田理代子『ベルサイユのばら』・『オルフェウスの窓』、萩尾望都『ポーの一族』、竹宮恵子『ファラオの墓』、木原敏江『アンジェリク』、庄司陽子『生徒諸君!』、美内すずえ『ガラスの仮面』、あしべゆうほ『^{デモス}悪魔の花嫁』などが一挙に韓国に流れ込んだのである。市場は日本漫画に席卷された。

何も知らない少女たちは、海賊版やベッキ漫画で大量の日本漫画を読破し、影響を受けた。後年、それらが韓国漫画ではなかったという真実を知った彼女たちの、だまされていたという苦い思いと作品への感動が混じり合う気持ちは複雑である。

ちなみに『オルフェウスの窓』は、ドイツやオーストリアを舞台にした第一部・二部はともかく、第三部はロシアの社会主義革命を主題に置くので、反共を国是とした韓国では当時出版されていないだろうと思いきや、漫画マニアのキム・ジヒョンさんから「やっぱり日本人は韓国の海賊版業者の偉大さ(?)を知りませんね。それはフィンランド独立運動に設定を変えて出版されたんです」と言われ、苦笑せざるを得なかった。

2. 第二世代と同人誌『九番目の神話』

その70年代から80年代には、少女漫画第一世代（60年代）と、『キャンディ』以降の少女漫画復興期・第二世代（80年代）をつなぐ作家たちがいる。

チャ・ソンジン（72年デビュー）の、一種の「バレエもの」『銀盤上の妖精』（1982）は、情熱、負傷、絶望、傷ついた人間性回復、という進行で、けなげなヒロインが幸福になりさえすればよかった従来の漫画から離れ、人間関係のありかたに主題を置いた点が新しかったという。

80年代、受験戦争で勉強に追われながらも、前の世代よりも格段の豊かさを楽しむ少女たちの異性・社会・人生への関心にこたえる作品が、ロマ・コメの登場である。日本では『愛が舞う場所－梨花物語』（双葉社）、『キーセン物語』（タイガーコミックス）で東洋画風の大人向き作品で知られる^{キムドンフ}金童話（75年デビュー）は当時、『木馬の詩』のようなく可愛く明るいヒロイン・美人のライバル・不良っぽい男の子という定石で十代の読者の心をつかんだ。しかし、「ヒロインは人を憎まない純真な少女」でなければいけないという当時の限界から、作中人物の内面的掘り下げに限界があったと、パク・イナは指摘する。

その1980年にデビューしたのが、90年代に日本の『モーニング』（講談社）で『允姫』『李さん家の物語』を発表した人気漫画家・^{ファンミナ}黄美那だった。当時、新人漫画家を育てるより、安易なベッキをさせて収益を得ようとする出版体制に逆らって、オリジナル作品の創作にこだわった彼女は、日本漫画に負けないスケールの大きさと画力、波瀾万丈のストーリーで自身の作品を認めさせた。作品のあまりの面白さに、検閲側が「日本漫画の海賊版に違いない」と疑ったほどである。当時の代表作『グッバイ・ミスタ・ブラック』（1983）は、19世紀の豪州と英国を舞台

に、カゲのある青年と純心な少女、という70年代末のセオリーを踏襲した作品である。愛と復讐、和解と新生を描いたこの作品は、韓国少女漫画の代名詞となり、代々の長髪ロックスターがミスタ・ブラックと呼ばれる現象も起きた。

黄美那（1961年生まれ）と前後してデビューした同世代の作家たち、『1815…』の金辰（1960年生まれ）、『北海の星』の金恵璘（1962年生まれ）、『アルミアンの四人の娘たち』の申一淑（1962年生まれ）、『星の光の中へ』の姜敬玉（1965年生まれ）など、62年組ともいべき「第二世代作家」は、現在でも新しいジャンルや表現にいどみ続け、少女漫画界をリードする存在である。

新人時代の彼女たちは貪欲に日本漫画を読み、テクニクを身につけていった。その手探りの過程では技法やストーリー構成を日本から借りることもあったが、作品の内容やメッセージを読み取らず、表面的な絵柄や画面処理のみを見て「日本の模倣だ」と即断するのは適当ではない。そもそも漫画がアートとして確立していない段階で漫画を描こうとすれば模倣から入るしかなく、それは日本の漫画家も同様であった。『ベルばら』も、先行の『白いトイカ』の影響を受けている。ちなみに、グレアム・グリーンは『失われた少年時代』において、強い印象を受けたものは、自分の作品の中で何らかのかたちで消化するまで、その影響から抜け出せないことを体験的に語っている。

その段階を通り抜けた彼女たち若手作家が、日本風漫画にあきたらなくなり、韓国少女の日常生活と感情に合ったものを生み出そうとするのは自然の流れである。

ところがそこに壁として立ちふさがったのが、貸本出版社と検閲制度だった。出版社は漫画の主題から内容展開、登場人物の名前にまで干渉し、また表現の制約も大きかった。黄美那の場合、知らないうちに執筆中の人気作品『アニユス・デイ』が他社に売り飛ばされるという目があったことがある。抗議すると、「続きは他の漫画家に描かせるぞ」とお

どされたと回想する。漫画が途中から作者が変わるなど考えられないことだが、当時は漫画も漫画家も読者も、その程度のものだと軽く思われていたのである。

また、80年代『恐怖の外人球団』(李賢世^{イヒョンセ}。外人とは外国人ではなく、はみだし者・アウトローを指す)のヒットによる劇画ブームは、貸本屋の主利用層を子どもから青年層に移したが、乱立による競争から、終夜営業でポルノビデオを上映する店も現れた。また、韓国漫画に比べれば開放的な日本漫画の性表現・暴力シーンは、その部分をスミ塗り・ボカシで修正して海賊出版され、「漫画＝低俗」というイメージを一般に広めた。「漫画を読むのは不良」「貸本屋は不良の溜まり場」という親や学校の評価は、漫画に近づこうとする女子中高生の足にブレーキをかけがちであった。

そこで1985年、黄美那、金恵璘、申一淑、金辰、李正愛^{イジョンエ}、ユ・スンヒ、イ・ミョンシン、ソ・ジョンヒ、ファン・ソンナ(黄美那の実妹)という「第二世代」若手漫画家9人が集まって、〈ナイン〉という集まりを結成し、貸本体制と検閲を通さない同人誌『九番目の神話』第一号を制作した。

「『やってみる?』と言っているうちに『やってみよう』になった。今思うと無謀だったけど、私たち自身で、描きたい作品を描くための道を作るんだという気持ちで始めた」

と創設メンバーの金恵璘は語る。

『九番目の神話』は、検閲を避けるために非売品とし、はがきで申し込みを受けつけた。

最初は千部を印刷したという。貸本と違って長く手元に置ける美しいイラスト、個性的で自由な表現の短編9作品のほか、漫画を読み捨て娯楽ではなく作品として考える意識を見せた韓国漫画史や少女漫画論を掲載し、後進を育てるための新人公募を行った。この第一回公募に入選したキム・ミリムは現在も活躍する漫画家である。『九番目の神話』は多く

の女子高生の支持を集め、作家たちは同人誌制作と郵送配布に忙殺され、嬉しい悲鳴をあげた。この人気を見たある出版社が制作費を提供、委託販売となり、3000部が出た。

この『九番目の神話』の成功により、少女漫画雑誌の収益性が証明された。社会的にも、1979年の肅軍クーデターで政権をついた全斗煥チョンドファンが、市民による強い民主化運動に圧された形で1987年に退陣表明する。そして直接選挙による大統領選挙が実施され、1988年にソウルオリンピックが開催された。この年、実力派作家を集めて創刊された韓国初の少女漫画雑誌・月刊ルネサンス（図書出版ソファ）によって、少女漫画は初めて雑誌の時代を迎える。

ルネサンスのもうひとつの特徴は、新人公募によって次の第三世代（90年代）の少女漫画界を準備したことと、少女漫画読者たちが集まって連帯する場を提供したことである。

その余波として漫画同好会も活発化し、1983年に高校生だった姜敬玉が設立した有名なPACを初めとする多くの団体が現れ、新しい才能を育てていった。

こうして、新しいオリジナル作品を描きたいという意欲的な漫画家は雑誌に移動し、マンネリ的な世界に安住する作家は貸本出版社に残るといふ二極分解が始まった。第二世代作家たちが貸本で執筆していた長編作品が1990年代前半に次々に終了すると、貸本少女漫画界には、粗製濫造漫画と日本漫画海賊版しか残らなかった。

連載と読み切り短編という新しい雑誌形式は、読者の反応がストレートに作家に伝わる。貸本屋出版社が遮っていた読者と作家は、雑誌を介して初めて出会ったといえる。自分たちが描きたいものを描きたい、という一心で「載せてくれるメディアがなければ自分たちで作ればいけない」と体制に反旗をひるがえした第二世代漫画家は、韓国少女漫画界に大きな道を開いたのであった。

3. 雑誌の時代

ルネサンスの成功により、ライバル誌も生まれた。『宝島』の姉妹誌として1991年に創刊された隔週刊りぼん（育英財団）である。テンギは、ルネサンスから敏腕姜仁善を編集長として招き（彼女はその後、1997年NINE（ソウル文化社）、2003年OWHO（時空社）など注目すべき少女漫画雑誌をつくり続けている）、ウォン・スヨンのしゃれたラブストーリー『フルハウス』（2004年にドラマ化）で大衆的な支持を得る一方、シグノス星から地球に亡命した王子の救世主としての帰還という設定で愛と自己犠牲を追求した黄美那『レッドムーン』、古代高句麗を舞台に人間関係のもろさや確執を扱う金辰『風の国』、鉄器・青銅器文化交代期の東北アジア世界を舞台に人間の意志の強さ・美しさを女性主義的な視点で描く金恵璘『火の剣』（ただし作者は、女性を人間として描いているだけのことで女性主義といわれるのは心外だと繰り返し語る）、等を連載し、ロマンス物に偏らない少女漫画の地平を広げていった。これらは、雑誌を転々としながらも連載が継続され、新出版社で単行本が出し直されるほど読者の支持が強かった。

そこに1993年、隔週刊のタッチ（図書出版大元）とウィンク（WINK）（ソウル文化社）が参入する。

前年『スラムダンク』のライセンス連載で雑誌・少年チャンプを成功させた大元は、タッチでも、『赤ちゃんと僕』『ぼくの地球を守って』（韓国題・わが愛アリス）『動物のお医者さん』（韓国題・ドクタースクール）など白泉社系漫画ライセンス連載を主軸にした。

それに対しウィンクは、韓国人気漫画家の連載と新人発掘で対抗した。近未来エスパー物で、自分と周囲の微妙な違和感を描き出した姜敬玉『ノーマル・シティ』、王位をめぐる剣と魔法の西欧中世を描いた申一

淑の『リネージ』(97年にオンラインゲーム化され、日本には『リネージュ』として移入されている)、品のよいカラーイラストが万人受けする李恩恵『BLUE』(ファンシー商品化してヒット。97年にはCDも出された)などの第二世代ベテラン陣である。

また、ウィンクからデビューした新人作家(第三世代)の作品としては、学園生活と芸能界という少女好みの設定の中で、成長する17才の心理に焦点をあててヒットした羅芸利『勝手にしやがれ』、日常の中に流れるさりげない愛情を耽美的な絵柄で描いた朴姫貞『ホテル・アフリカ』、鋭い感情描写にすぐれたユ・シジン『クール・ホット』などが登場した。

90年代の少年漫画界が『ドラゴンボール』『スラムダンク』のヒットによって日本漫画一辺倒になったのと違い、「自分たちの」感性にこだわっていた少女漫画界は日本漫画との競争力を備えており、読者の支持は国産漫画のウィンクに上がった。

そこで大元はタッチ休刊後、韓国漫画に主力を置く月刊ホワイト(WHITE)を95年に、隔週刊イシュー(ISSUE)を96年に出す。ホワイトでは、「ロミオとジュリエット」のマフィア版というべきウォン・スヨン『エリオとイベット』、自分を男だと思ひこむ少女のセリフの小気味良さと、すっきりした絵が魅力的なキム・ギへ『雪』などの大衆的な作品が連載された。タッチ・イシューの第三世代の作家の作品として、李正愛の同性愛のフォルムをとりながら人間愛を追求する『列王大戦記』、十代のありのままの感性を描いたイ・ピン『クレイジー・ラブ・ストーリー』などが現れる。

第二世代までが作品の舞台を外国・架空世界・歴史物にすることが多かったのは、検閲対策という意味もあった。作品中で現代韓国の社会の底辺を描いただけでも政権批判と判断されて検閲にひっかかるのでは、そうする以外なかった。

しかし1993年以降、キムヨンサム金泳三、キムデジュン金大中大統領の文民政権により本格的

な民主化時代が始まり、検閲も廃止されていく。この民主化の時代に本格的な活動を始めた第三世代は、現代社会や学校を背景にしたリアルな作品を描けるようになった（ただし、1997年の青少年保護法成立による大型書店からの漫画一斉撤去〔2001年頃から売場復活〕や、『列王大戦記』中断に現れるように、社会の漫画への偏見・攻撃が存在しないわけではないが）。

この雑誌競争は、人気作家の争奪戦をも招き、1994年にルネサンスが、1996年にテンギが戦線離脱する。

ルネサンスの遺志を継ぐような形で、1998年にソウル文化社が、今や成人した80年代少女漫画読者を対象とした月刊NINE（前述の同人団体とは無関係）を創刊した。成人女性向きといっても、レディス物・オフィス物ではなく、前衛的な実験作品が多いマニアックな雑誌であった。これは、二十代にもなって漫画雑誌を買う層はマニアに限られる、という韓国の市場性によるものと思われる。NINEは健闘したが2001年3月号を最後に休刊した。1999年に隔週刊ケーキで少女漫画界に参入した時空社が、2003年、B5判の高級感ある装丁、クォン・シナのイラストノートブックの付録、ハン・ヘヨンなどの二十代女性の日常的感性を描いた作品で大衆性と作品性のバランスを取った隔月刊誌OWHOを創刊したが、漫画の市場不況の流れには勝てず、2004年に休刊した。2004年、姜敬玉・金辰・ハン・ヘヨンなどマニアックなファンを擁する実力派作家を中心に月間HER'Bが創刊され、期待が集まっている。

なお、ハクサン文化社も1997年に小中学生向き月刊パーティでやや遅れて市場参入した。

したがって2005年4月段階で市販されている少女漫画雑誌は以下の通りである。小中学生向の月刊ミンク（ソウル文化社）、月刊パーティ（ハクサン文化社）。中高生以上向の隔週刊ウィンク（ソウル文化社）、隔週刊イシュー（大元）、月刊シュガー（ソウル文化社）、高校大学生以上向月刊HER'B（ハーブ）、以上6誌である。

このような、出では消える雑誌体制では長編の中断が大きな問題となるが、読者からの支持や漫画家の意欲が強ければ、他誌に移って連載継続、既発表分の単行本は新雑誌から発行し直される、という場合も見られる。あるいは、雑誌連載を放棄し、ネット連載あるいは、直接単行本刊行の道を選ぶ場合もある。雑誌連載の過程を経ない作品発表は日本市場から見ると違和感があるが、貸本時代の歴史と、日本漫画の単行本刊行の環境の中では、それほど不自然ではない。

インターネットのポータルサイトでは雑誌連載作品を月後れで有料配信したり、ポータルサイトでのヒット作品が単行本出版される例もあり（カンブル『純情漫画』、日本翻訳版『純情物語』双葉社）、オン・オフラインの提携が強い。

日本漫画ライセンス版連載は、ソウル文化社系も1998年から方針を変え、『花より男子』などの日本漫画連載を開始した。これは一部のマニアの眉をひそめさせたが、現在では各社ほとんどの雑誌に1~3本のライセンス連載があるのが普通である。

2004年10月現在でライセンス連載されている作品は、以下の通りである。

ソウル文化社の、月刊シュガー2本（杉浦志保『シルバーダイヤモンド』、MATSUMOTO TOMO『美女は野獣』）、月刊ミンク2本（槇ようこ『愛してるぜベイベ★★』、種村有菜『満月を捜して（韓国題・月光天使）』。大元の月刊イシュー2本（TAJIMA MIMI『学校に行こう』、けらえいこ『あたしんち』。ハクサンの月刊パーティ1本（中原アヤ『ラブ★コン』（韓国題・ラブコンプレクス）、というように、各誌1、2本のライセンス連載を持っている。

少年誌のアイキュージャンプ（ソウル文化社）が20本中7本（さとうふみや・天樹征丸・金成陽三郎『金田一少年の事件簿』、安西信行『MAR』など）、コミックチャンプ（大元）が20本中5本（大場つぐみ『DEATHNOTE』、尾田栄一郎『ONE PIECE』など）、ブッキング（ハ

クサン文化社)が11本中4本(富樫義博『ハンター×ハンター』、高橋留美子『犬夜叉』など)にくらべると、少女漫画は日本漫画への依存度が高くない。

しかし少女漫画分野でも、単行本市場では日本漫画が優勢である。2004年10月の1ヶ月間の発行点数は101点で、日本漫画ライセンス版58点、韓国漫画43点である。2年前のほぼ同時期が218点だったのに比べると、不況の影響と漫画市場の縮小が実感される。当時は67パーセントを占めていた日本漫画が58パーセントとやや減ったのは、日本漫画自体のコンテンツ不足も否めない。出版社別に見ると、日本漫画はソウル文化社19点、大元18点、ハクサン16点と三大メジャーがほとんどを占めている。韓国漫画はメジャーではソウル文化社9点、大元13点、ハクサン5点、時空社1点のみで、その他は少女漫画界ではマイナーな出版社となる。時空社は漫画からの撤退がうわさされている。

以前は依歓『宣和恋』等の台湾漫画翻訳版が5パーセントは市場に見られたが、最近はあまり見かけない。

販売順位も、2004年10月の少女漫画月間ベスト10のうち、コミックバンク調べで8点が日本漫画を占めた。(宮坂香帆『彼 FIRST LOVE』、高屋奈月『フルーツバスケット』、種村有菜『満月を捜して』矢沢あい『NANA』)。韓国漫画は朴素熙^{パクソヒ}『宮』、キム・ヨンジュ『プラティナ』が入るのみであった。

おわりに

以上、雑駁ではあるが韓国少女漫画の流れを追ってみた。ただし、90年代後半からより活性化して広がったアンダーグラウンド漫画文化、同好会、同人誌、コミケ、オンライン漫画活動については、触れるを得なかった。

現在、第二・第三世代の作家も個性を生かした作品を発表し続けているが、漫画界の主流は、貸本屋時代を知らない第四世代の漫画家の、新しい感覚の作品群である。80年代から90年代にかけて、より良い社会をもたらすために努力していた世代と、90年代以降、民主化も経済的繁栄も実現した後に物心ついた読者が求めるものは、当然違ってきている。また、80年代に少女漫画を読み始めた世代も、2000年代には少女漫画を離れていき、少女漫画界は世代交代が行われた模様である。

第四世代作家のうち、コンピュータグラフィックと徹底したマーケティングでカリスマ的な支持を受けるチョン・ゲヨンは『オーディション』『DVD』などで10代の感性をとらえるのに成功している。

朴素熙^{パクソヒ}『宮』(日本語版『らぶきょん— LOVE in 景福宮^{キョンボクン}—』季刊ウンポコ・新書館連載中)は、「もしも韓国がまだ王政だったら」という設定のもとで景福宮を舞台にした作品である。同級生の皇太子と政略結婚させられた女子高生をヒロインとするロマコメだが、コスチュームロマンと学園物を融合させた上に、ヒロインを甘やかさずギャグの対象にする思いきりの良さで支持を集めている。イ・ヨンヒ『おまえカッコよすぎ』も、伝統ロマコメのパロディとして成功しているが、それだけでなく、作品としてのメッセージ性、登場人物らの成長過程をきちんと追っている点で秀作である。

韓国の漫画ファンが、自国のもの以外に海外の漫画も楽しんでいるというのに、日本の読者は自国のものしか知らない、というのではちよっ

と悔しい。インターネット時代に入って国境が低くなったことに感謝しながら、面白い作品、良い作品に出会えるチャンスがふえることを願っている。

■ 参考文献・サイト ■

アニメイト『ANIMATE』1号（韓国漫画を日本語で紹介した韓国の同人誌）1996年

漫画評論家協会編『韓国漫画を近くで見ると』ヌンピッ、ソウル、1995年。

キム・ソンホ『韓国の漫画家55人』プレピッ、ソウル、1996年。

漫画評論家協会編『ホホからアハまで』教保文庫、ソウル、1998年。

パク・イナ『パク・イナの少女漫画の美味しい読み方－誰がキャンディをひっかけたか』サルリム、ソウル、2000年。

パク・イナ『パク・イナの楽しい漫画屋』時空社、ソウル、2002年。

チェ・ウリョン『漫画に生きる－漫画家15人の漫画人生』人物と思想社、ソウル、2002年。

漫画集団・トゥゴパジャ編『漫画世界征服』キルチャッギ、ソウル、2004年。

漫画インフォメーションサイト MANI <http://www.mani.co.kr/>

【付記】 本稿執筆にあたって、九州大学・日下みどり先生、因京子先生、漫画家・黄美那氏・朴素熙氏、ソウル文化社局長・金英中氏、WINK誌呉京垠氏・尹智恩氏（ソウル文化社）、朝鮮日報東京支局長・崔治氏、漫画評論家・宣政佑氏、梨花女子大学大学院（当時）盧秀仁氏、漫画専門書店・漢陽文庫（ソウル）の援助を頂きました。ここに記して謝意を表します。ただし、筆者の誤解による間違いの責任はすべて筆者に帰します。





128 * 달에서 온 소년







오후의 홍차처럼 그윽한 만화 [오후]

Owho

VOL.2
 SEPTEMBER | 2003 | BIMONTHLY | MANWHA | MAGAZINE

권교정 유시진 이빈 나에리 한승희 송재상 한해연 오시나가 후미 고유리 마 이치코 몽환소왕자 석종민 장현선

모든 분께 드리는 선물
권진아
 <안달루시아 풍경> 空册
 <엘리스> 책갈피
 정권호 예진 감사인물 50명
 <백귀야행> 오구로 오시로 피커

9 771599 866504
 ISSN 1599-0665

SIGONGSA

JULY 2004 No.14 COMIC MAGAZINE FOR NEW GENERATION
<http://winklove.co.kr>
<http://www.jumps.co.kr>

대한민국 대표 순정만화잡지

wink

715

표지 일러스트 이영희

영도형간 11주년 기념호
 O.P. 캠프 & 캠프 뉴노믹 앙갚음
 일본에서 비행기 타고 날아왔어요~
 <올센다 남자> 약걸 기념
 강사 선동 O.P. 캠프

궁 박소희
 허싱 강은영
 FEVER 박희정
 Let 다이 원수연
 Not so Bad 이소안
 반혼사 김태연
 암살이 Lilit
 천국의 고양이들 양아

독자들의 탄생과극한
 화재만화의 새 연재작!!

마지막 회 언녕이라고 말하지 마!!
 영원이 기억일게~!!

너너무멋져

이영희

완결 기념 선물을 드려요!

ANGEL SHOP

이영희

무더위를 식여주는 섹시맨들! 탕뎀 2선

김성 호리

매달린 손

조주희

러브 단편

눈 내리는 거리

남다현

김은희 THE FOUNTAIN

최순원
 (너너무멋져) POSTCARD
 값 3,000원

